

滕王閣 王勃

滕王高閣臨江渚  
佩玉鳴鸞罷歌舞  
畫棟朝飛南浦雲  
朱簾暮捲西山雨  
閒雲潭影日悠悠  
物換星移度幾秋  
閣中帝子今何在  
檻外長江空自流

滕王の高閣 江渚に臨み

佩玉鳴鸞 歌舞罷みたり

画棟 朝に飛ぶ 南浦の雲

朱簾 暮に捲く 西山の雨

閒雲 潭影 日に悠悠

物換り星移り 幾秋をか度りし

閣中の帝子 今何くにか在る

檻外の長江 空しく自ら流るるのみ

滕王の建てた高殿は、贛江のなぎさにのぞんで聳え立つ。

かつてここに集った貴人たちの腰に下げた佩玉の触れあう音も、訪れる馬車の高らかな鈴音も、もはや聞こえず、にぎやかな歌や踊りも、昔のこととなつてしまった。

美しく彩どられた棟木のあたりには南浦から湧き出る雲が朝日に染まりながら飛びかい、美しい朱簾は夕暮れどき、西山から迫りくる風や雨に吹かれて巻き上がる。

静かにただよう雲、深い淵の碧い色は、昔と変わりなく日々のどかな姿をくりかえしている。

しかし人の世の万物は移ろい、歲月は速やかに流れて、唐王閣の落成以後幾年過ぎたことであろうか。

この高殿にいた帝の御子は、今はどこにおわすのか。手すりの前を流れる大江（贛江）は当時そのままに、滔々と流れゆく。

《佩玉》腰に下げる玉

《鳴鶯》鶯という鳥の形をした鈴

《畫棟》美しく彩色した棟木

《朱簾》朱に塗ったすだれ

《潭影》川の淵のたたえている光

《星移》歳月の経つこと

《帝子》高祖李淵の子である滕王李元嬰をさす

江西省の省都、南昌。この街でひときわ目を引く六層の高楼「滕王閣」は岳陽楼、黄鶴楼とともに江南の三大楼と呼ばれています。六五三年、唐太宗の弟、滕王李元嬰が洪州都督に在任中この地に建てた楼閣で、以来荒廃しては再建されること二十九回に及びます。近年では一九八九年、唐時代の遺跡の約百メートル近くに、宋代の様式を取り入れた新「滕王閣」が建てられました。

王勃は随の大儒王通の孫で、王積は大叔父にあたります。六歳で文辞をよくし、九歳で顔師古の漢書注解を読んでその誤りを指摘したという神童でした。十代で科擧に及第して史書編修官となりましたが、皇族が鬪鶏に興ずるのを諷刺した文を書いて免職となりました。またその後には罪人を匿い、それが露見することを恐れて殺害したことが発覚し、死刑になるところでしたが、罪一等減じられて官位のはく奪で許されました。しかしこの際に、父親王福時は自分の罪でベトナムまで左遷されます。

王勃は傷心のうちに父を訪ねて旅をしていましたが、その途中、滕王閣の修繕を祝う大宴会が開かれることを聞いて立ち寄ります。しかし滕王はすでにこの閣の主ではなく、派手な遊行が過ぎて失脚していました。新たな主となった都督閻公はこの閣を修繕させ、自分の婿に予め修繕の記念の序（文章）を作らせておいて、席上それを披露して出席した客に誇ろうという考えでした。そして比べるため序を作るよう客に請いましたが誰もがしり込みし、最年少の王勃ただ一人即興で序を作ることをかかって出ます。そして王勃は後世にも称えられる名文「滕王閣序」を作り、最後にこの詩「滕王閣」を賦したのでした。そしてその見事な序と詩は都督閻公と参加者を感動させることになりました。「序」では、不遇な人生を送った古人たちの事跡を述べ、その運命を王勃父子の境遇になぞらえたあと、不遇に屈せず人生に希望を持ち続けるべきことを説いています。「老いては当に益々壯なるべし」との一節は有名です。そしてこの「滕王閣」では華やかな宴を催した滕王は今何処にと、時世の移り変わりが激しいことを長江の流れに重ねて無量の感慨を込めて詠じます。

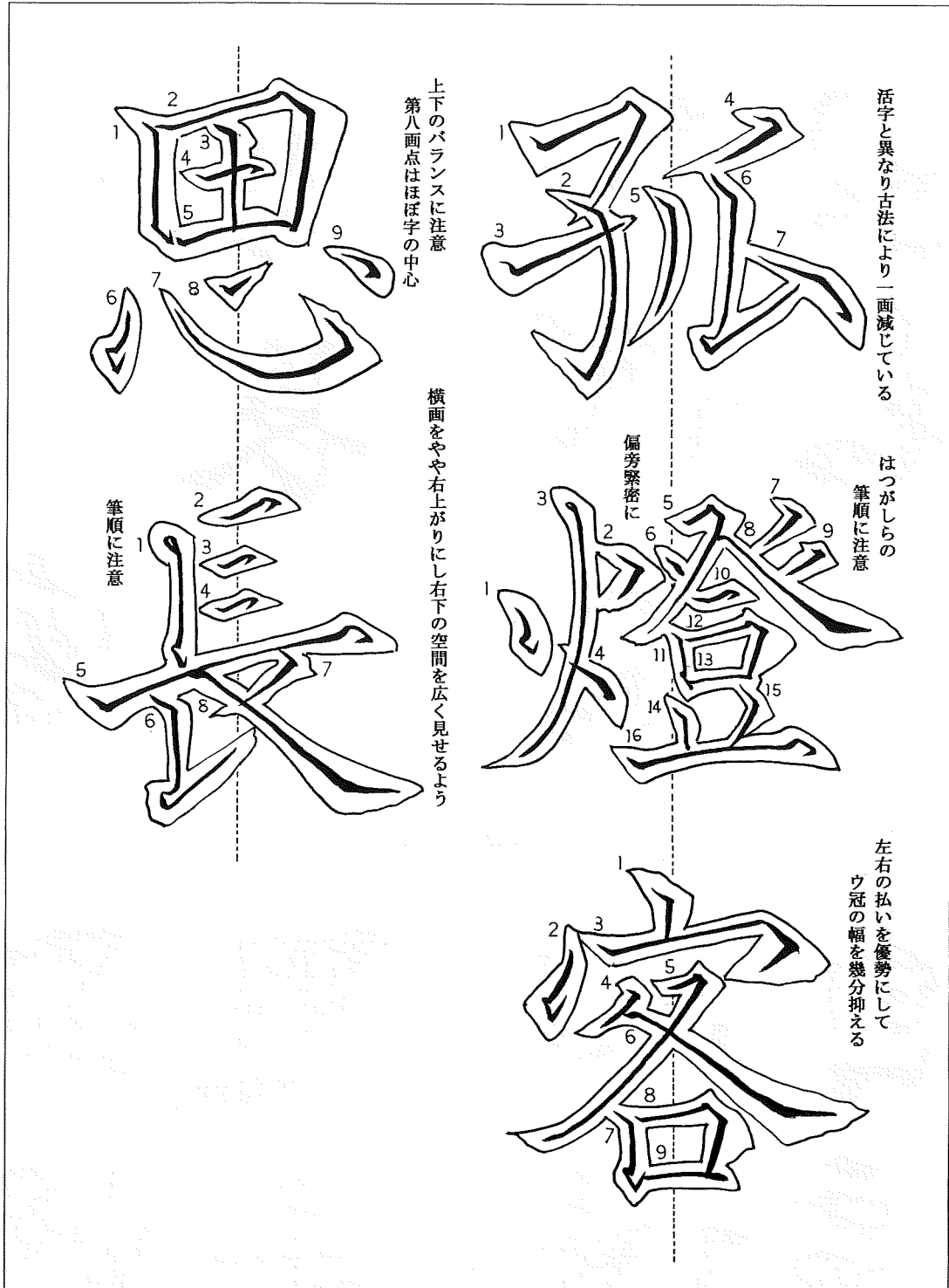
王勃は不幸にもこの先の旅の途中で南の海に落ち、二十七歳の若さで亡くなり、この「滕王閣」が絶筆となりました。

参考文献・唐詩選（岩波文庫）・漢詩体系6（集英社）・漢詩の事典（大修館書店）

読み  
孤燈客思長し（ぽつんと灯火一つ、旅人の思いは長く果てしない・謝棒「大梁冬夜」）

思 孤  
長 燈  
客

佐藤象雲書



一般部規定課題出品について  
 ・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。  
 ・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。  
 ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

行書

孤燈客  
思長

孤燈客  
思長

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

次号課題

隸書

心遠地  
自偏

孤燈客  
思長

心遠ければ地自ずから偏なり

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支 部		順 位		氏 名	
七五三					
宮のおみ〜と出て					

山頭火

和泉溪石先生書

樂殊貴賤禮別尊卑  
 樂殊貴賤禮別尊卑  
 樂殊貴賤禮別尊卑

佐藤象雲書

音

ガクシユキセン  
レイベツソソビ

略解

昔中国の音楽は貴賤の区別があり身分に応じて楽しんだ。冠婚葬祭の諸礼式も尊卑の区別があり混同することはなかった。

河  
南  
京  
韓  
君

河南京の韓君……

■<sup>らいきひ</sup>禮器碑

(後漢・西暦一五六年)の臨書 (3)

象雲臨

『河南京韓君』

中国で禮器碑を深く学んだと言われる書家は、鄧石如、伊秉綬、何紹基、楊峴、楊守敬など清時代の金石派を中心に数多くいます。特に楊峴(一八一九—一八九六)は明清の書家のなかで最も本碑を研究したといわれ、その臨書作品には波磔を誇張した独特な晩年の楊峴隸書の原型を見ることができます。また楊守敬(一八三九—一九一五)は日本に様々な金石拓本を紹介したことで有名ですが、この禮器碑を賞して書譜で言うところの性情(筆運び)と形質(形の本質)の両方が備わっているの唯一つこの碑であるとして、高く評価しています。

毎攬

毎つねに (昔人興感の由よしを) を攬みるに

毎攬

象雲臨

■王羲之・蘭亭序 (東晋三五三年頃) の臨書 (28)

「毎攬」

空海の「遍照發揮性靈集」に「古意に擬するを以って善しと為し、古迹に似るを以って巧と為さず」という言葉があります。この言葉を書の臨書に当てはめれば、古典の意とするところを汲み取って臨書することに意義があり、古典そのものの形だけを真似るだけでは決して巧みとは言えないということとなります。臨書の目標を形を似せて書くことに置くのではなく、古典の風趣に迫ることに着眼して学ぶことが大切ということなのです。一概に風趣といっても難しいことですが、その古典の出来た背景を考察し、特性や雰囲気等を常に考え感じながら臨書することが必要です。

また他の作家の目を通じて学ぶということも有益な方法です。空海が顔真卿を通して王羲之を吸収しようとしていたことは、先日仙台市博物館で開催されて展示されていた「聳誓指帰」が好例です。